

このたび、第19回日本保育学会において、思いがけなくも倉橋賞を受賞することができました。当時はただ感激で胸が一杯で何を考える余裕もありませんでしたが、日数がたつうちに、今後の責任の重大さを感じしみとみとかみしめております。今年の大会を通して、私の学んだことは数多くありますが、中でも、当番校であるということが、これほど大変なものである（もちろんやりがいのある大変さであり、私などはほんの一部のお手伝いをしたにすぎませんでしたが）ことをはじめて知りました。今となっては、発表原稿が届かずに胸をどきどきさせて郵便を待ったことや、スライドが発表者の指示にあわずに冷汗をかいたことなども、なつかしい思い出になりましたが、これまで、一日位おくれても思っただけで原稿の期限を守らなかつたり、当然のようないふ顔を学会に出席していたことを思うとほんとうに恥ずかしくなってしまうます。当番校の立場から、新しい研究を手がけたり、また自分の発表ばかりにかまってもおれない状態でしたので、過去六年余りの間、発表のことは全く考えずに、ただ、幼

児のしあわせを願い、両親教育の望ましいあり方を願って行なってきたものをまとめてみました。発表を目的とした研究でないために、種々の不備な点、統計の

倉橋賞を受賞して 松隈 玲子



たりなきが多く、あるものは、たくさん
の事例と望ましい方向へむかっていった
幼児一人一人の細かな記録だけで、多く

の立派な先生方の研究の中から、私のものがとりあげられましたことは、講評にもありましたが保育の中からとりあげ、誰にでも実践できる研究であったことであろうと思っております。それだけに、今後の研究については、この榮譽をけがさないためにも、一層努力して幼児教育の発展のために小さな力をさきあげていきたいと思えます。先日、ある保育所の先生が「先日の発表をきいて、私にも研究発表ができるのだという希望をもちました。今まではむずかしい表現をしなければ駄目なのだときらめていましたが」といわれ、またある幼稚園の先生は「家族人形をつくって園児と遊んでみました。いろいろと考えさせられています」と報告にきて下さいました。これらの言葉をきくたびに、研究は私個人のものではなく、多くの幼児たちにしあわせをもたらすものでなければならぬという研究に対する信念を上げましたような気持ちがあります。

諸先生方、そして皆さま方の今後の御指導御鞭達を心よりおねがい申し上げます。

(西南女学院)